

### 3. まとめ

最後に、本調査で得られた結果をまとめ、今後の課題について整理する。

#### (1) 回答者のプロフィール

調査協力者は、全体で 2357 名、平均年齢は 35.5 歳、本調査で回答の中心となる直近の妊娠の年齢の平均は、30.9 歳であった。サンプルの特徴として国勢調査の当該年齢の女性と比べて、中部・近畿地方居住者が多く、やや偏りがあること、4 大卒以上の高学歴者が多く、留意が必要である。

#### (2) 一番最近の妊娠の経験

一番最近の妊娠の経験で、希望した妊娠であった人が 8 割以上で、性別については「どちらでもよい」という人が約半数であった。妊娠中に胎児の性別を知ったという人が大多数で、全体の 4 分の 3 は医療者から説明されたと認識している。医療機関で診断前に妊娠していると感じたきっかけでは、「市販の妊娠検査薬」と「月経が止まって」を選択する人がそれぞれ 6 割程度いた。妊娠が判明した週数は 4～6 週の間で 3 分の 2 を占める。市販の妊娠検査薬は 9 割近くが利用していた。妊娠に気づいたときの気持ちでは「うれしかった」が 7 割以上で、「困惑した」という人は少ない。「ほっとした」「驚いた」は回答が分散した。妊娠初期の不安では、自身の体調や生活については 6 割前後で、胎児の発達に関することでは 7 割ほどが不安だったと回答している。一番最近の妊娠の際に、不妊検査・治療を受けた人は 17.3%であった。

#### (3) 出生前検査の経験

6 種類の出生前検査について、検査受検時の状況（検査を受検するか、周囲の反応など）と受検の経験、受検した時期を尋ねた。出生前検査の種類によって、異なる態度がみられた。以下、検査ごとにまとめていく。

**超音波検査：**自分で検査を希望した人が 4 割、「(自分の希望を考える間もなく) 医療者が検査をすると決めた」と回答している人が 4 割いた。超音波検査を「受けた」という人は 9 割を超えている。超音波検査を受けた頻度は、10 回以上が 4 割、6～10 回も 3 割で比較的頻度が高い。

**母体血清マーカー検査：**約半数は「そういう検査があることを知らなかった」と回答しており、3 割は希望しなかった（断った）。本調査の回答者で母体血清マーカー検査を「受けた」という人は 7.3%であった（他の推計等とくらべてもやや高いことには留意する）。

**羊水検査：**「自分で検査を受けることを希望しなかった（断った）」が 83.7%と多く、一方で、超音波検査を以外の他の検査とくらべて検査の存在自体を知らないという回答が少ない。本調査の回答者で羊水検査を「受けた」という人は 3.7%であった。

**NIPT**：「そういう検査があることを知らなかった」と半数が答えている。「自分で検査を受けることを希望しなかった（断った）」が 39.4%であった。本調査の回答者で NIPT を「受けた」という人は 1.7%であった。

**NT 検査**：「そういう検査があることを知らなかった」が 61.6%と多く、次いで「自分で検査を受けることを希望しなかった（断った）」が 26.4%であった。本調査の回答者で「受けた」という人は 6.7%であり、おそらく妊婦健診中にエコーで偶然 NT の厚みを指摘されたこと等も、「検査を受けた」と理解した回答も含む割合だと推測され、解釈には注意を要する。

**着床前診断**：「そういう検査があることを知らなかった」という回答が約半数である。「自分で検査を受けることを希望しなかった（断った）」が 41.0%とやや高い。本調査の回答者で着床前診断を「受けた」という人は 1.2%であった。別質問の検査の理解の回答とあわせてみると、当該検査の内容を誤解して回答している人を含んでいると思われる。

上述の 6 種類の各検査について、医療者からの説明がどのようにあったかという質問で、「説明はなかった」という人が、NIPT と NT では 7 割以上、母体血清マーカーや羊水検査では 6 割強、超音波検査でも 5 割弱いた。検査の内容について妊婦の側からは医療者の「説明はなかった」という認識をしている人が多いことがわかる。

検査を受けるかどうかについても、超音波検査では 7 割、それ以外の検査でも 6 割前後の人が「受けるかどうか尋ねられていない」という。「覚えていない」という回答も超音波検査以外の各検査では 1 割程度いる。検査について聞いたことがないという人も含めると、医療者から妊婦に受検の希望を問われる機会は少数である様子を確認できる。

検査を受けた/受けない理由について、検査ごとにみると、超音波検査では「受けるものだと思っていた」と 8 割以上の人が答えている。「妊娠の経過がわかるから」55.1%、「安心したいから」27.9%、「胎児の異常がわかるから」20.6%という理由が続いている。一方、少数ながら受けなかった理由では、複数回答で多く選ばれているが「受ける必要を感じなかった」25.0%、「産むと決めていた」「必要と思わなかったから」がそれぞれ 19.4%と続いている。

母体血清マーカー検査、羊水検査、NIPT 検査では、受けた理由として「胎児の異常がわかるから」が最も多い。母体血清マーカー検査や NIPT では「受けるものだと思っていたから」という人が 3 割程度いるが、羊水検査では 1 割程度しかいない。また、NIPT では「医師から勧められたから」を約 3 割が挙げており、受けた理由の構成が他の検査とはやや異なっている。

検査を受けなかった理由について、母体血清マーカー検査、羊水検査、NIPT 検査では「医師から言われなかった・勧められなかったから」を挙げる人が多く 4 割ほどいた。「必要と思わなかった」も 4 分の 1 ほどの人が選択している。

超音波検査でわかることは、胎児の成長を 9 割以上、胎児の身長・体重で 8 割、胎児の性別を 7 割の人が挙げている。

各検査を受検した人に、検査の結果でわかったことを尋ねたところ、母体血清マーカー受検者が検査でわかったこととして、3分の1は「陰性であること」を挙げ、「障害があることの確率」は2割であった。「何もわからなかった」も2割ほどであった。羊水検査に進んだ人は12.3%であった。羊水検査でわかったこととして半数が「陰性であること」を挙げ、「胎児の障害の有無」と「胎児の性別」についても約3割の人が挙げている。その後、約9割が妊娠を継続していた。

#### **(4) 妊娠・出産に対する意識**

妊娠・出産に対する基礎的な理解について、染色体異常や出産年齢に関する知識は正答率が高いが、卵子凍結や羊水検査の受検率については不正解、もしくはわからないが多い。

妊娠・出産に関する様々な考え方について、「入手できる情報は出来る限り知っておきたい」、「妊娠中に赤ちゃんのことを詳しく知りたい」という意見には大多数が同意しているが、「結婚したら子どもをもつ」、「中絶」、「子どもをもつためには早く結婚」という考えに対しては意見が分かれていた。

少子化政策に関する取り組みはいずれにおいても、行われていないという評価であった。とくに WLB（ワーク・ライフ・バランス）については不十分であるという意見が多い。

出生前検査に関して、内容によって正答率に差があり、またすべてを正しく理解している人は少ない。

#### **(5) 今後の課題**

本報告では、集計結果の報告にとどまるが、10年前の調査等と比べ、市販の妊娠検査薬での妊婦の不安や、妊娠したと感じるきっかけなどの、2010年代を中心とする女性の妊娠経験の状況を捉えることができた。また出生前検査についても NIPT の経験など、新たな検査の経験について量的データを得られた。（これだけ妊娠や医療の情報化が進んでいても）女性の理解や考え方は多様であることや、検査の説明や受検の意思確認などをめぐる医療者とのやり取りについて、女性・妊婦がどのように感じたり、経験したりしているのかを記述することができた。

今後は量的データの特性を生かして多変量解析等の手法を用いて、社会経済的属性や地域、妊娠に関する経験などを考慮して分析を深めていくとともに、2013年調査との比較を行い、多角的な検討を行いたい。